

★主に以下の動画にて学習

<https://www.youtube.com/watch?v=cNEhKEb9-JU>
<https://www.youtube.com/watch?v=2IB7vkfGeAA>
<https://www.youtube.com/watch?v=fUZO6-0o3ds>

サポートベクターマシン(SVM)

「Support Vector」とは、データを分割する直線に最も近いデータ点の事

サポートベクターを定めてこのように分割線が決まれば、あとはコレより上にあるか下にあるかで、どのクラスに属しているかの予測ができる。
SVMの肝は、マージン最大化とカーネル法により非線形データを扱えるところ。

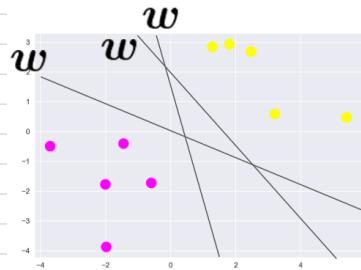
• SVMのメリット

データの次元が大きくなても識別精度が良い
最適化すべきパラメータが少ない

• SVMのデメリット

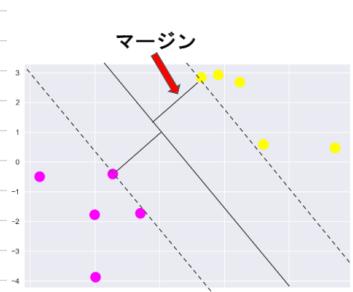
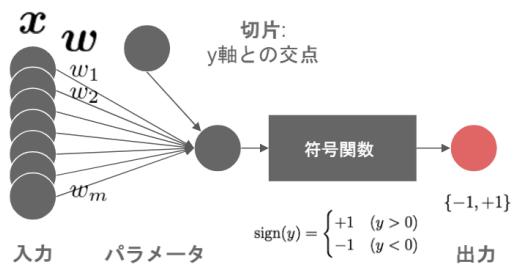
学習データが増えると計算量が膨大になる
基本的に2クラス分類に特化している
スケーリングが必要
(SVMでは距離を測定するので、大きい範囲をとる特徴量に引きずられないようにする)

$$y = \mathbf{w}^T \mathbf{x} + b = \sum_{i=1}^m w_i x_i + b$$

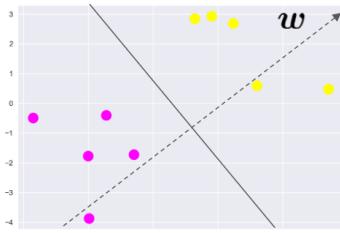


決定境界はいくつも考えられる

- 「線形判別関数ともっとも近いデータ点との距離」を「マージン」という
- マージンが最大となる線形判別関数を求める



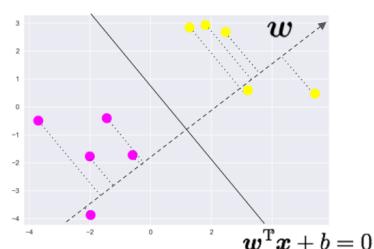
線形判別関数 $\mathbf{w}^T \mathbf{x} + b = 0$



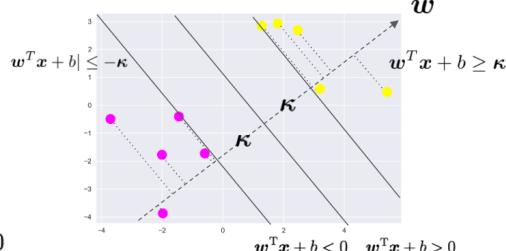
マージンをパラメータに依存する関数として表現！

■目的関数の導出(準備)

$$\mathbf{w}^T \mathbf{x} + b$$



$$|\mathbf{w}^T \mathbf{x} + b| \geq \kappa$$



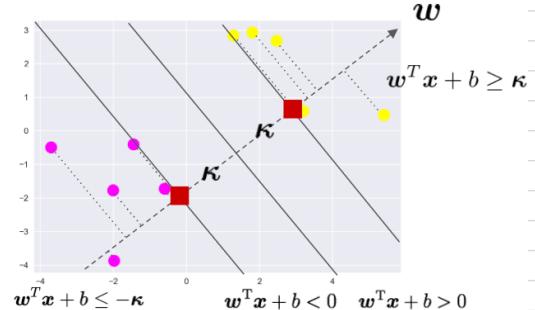
各クラスのデータを w の方向 w へ射影した点
 w 軸に座標を変換

線形判別関数のマージンを κ とした時に
全てのデータ点でなりたつ条件
(特に路肩上のデータに対しては $=\kappa$ が成り立つ)

標準座標系に修正！

$$|w^T x + b| \geq \kappa$$

$$\begin{aligned} \rho(w, b) &= \min_{x \in C_{t_i=+1}} \frac{w^T x_i}{\|w\|} - \max_{x \in C_{t_i=-1}} \frac{w^T x_i}{\|w\|} \\ &= \frac{1-b}{\|w\|} - \frac{-1-b}{\|w\|} \\ &= \frac{2}{\|w\|} \end{aligned}$$



w が決まればマージン
が決まる

<https://manabitimes.jp/math/857>

点 $A(x_0, y_0)$ と直線 $l : ax + by + c = 0$ の距離 d は、

$$d = \frac{|ax_0 + by_0 + c|}{\sqrt{a^2 + b^2}}$$

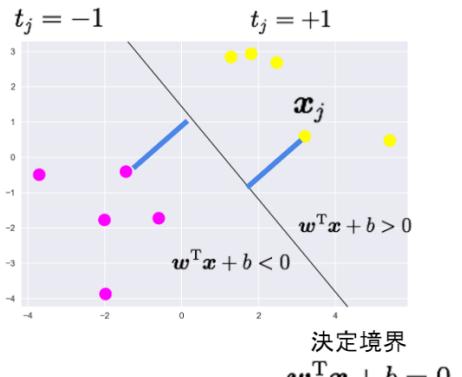
各点と決定境界との距離は、点と直線との距離の公式から
例えば：<https://mathtrain.jp/tentotyokusen>

$$\frac{|w^T x_i + b|}{\|w\|} = \frac{t_i(w^T x_i + b)}{\|w\|}$$

絶対値の定義より

マージンとは決定境界と最も距離の近い点との距離なので、

$$\min_i \frac{t_i(w^T x_i + b)}{\|w\|}$$



SVMはマージンを最大化することを目標なので目的関数は

$$\max_{w,b} \left[\min_i \frac{t_i(w^T x_i + b)}{\|w\|} \right]$$

マージンが最大となる直線(パラメータ)を探す

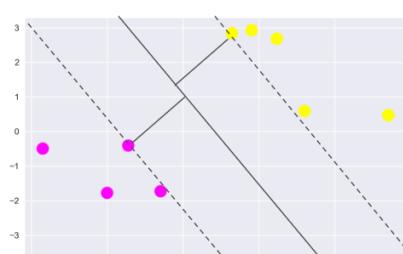
マージン上の点において、 $t_i(w^T x_i + b) = 1$ が成り立つため、すべての点に対して、 $t_i(w^T x_i + b) \geq 1$ が成り立ち、目的関数は以下のようになる。

$$t_i(w^T x_i + b) = 1$$

$$t_i(w^T x_i + b) = 1$$

$$t_i(w^T x_i + b) > 1$$

$$t_i(w^T x_i + b) > 1$$



$$\max_{\mathbf{w}, b} \frac{1}{2} \|\mathbf{w}\|^2$$

マージンで正規化すると
成り立つ



サポートベクターマシンにおける主問題と双対問題

SVMの主問題

- 主問題の目的関数と制約条件

$$\min_{\mathbf{w}, b} \frac{1}{2} \|\mathbf{w}\|^2$$

$$t_i(\mathbf{w}^T \mathbf{x}_i + b) \geq 1 \quad (i = 1, 2, \dots, n)$$

上の最適化問題をラグランジュ未定乗数法で解く

ラグランジュの未定乗数法

- 制約付き最適化問題を解くための手法

制約 $g_i(\mathbf{x}) \geq 0 (i = 1, 2, \dots, n)$ のもとで、 $f(\mathbf{x})$ が最小となる \mathbf{x} は、

変数 $\lambda_i \geq 0 (i = 1, 2, \dots, n)$ を用いて新たに定義したラグランジュ関数において満たす

$$L(\mathbf{x}, \boldsymbol{\lambda}) = f(\mathbf{x}) - \sum_{i=1}^n \lambda_i g_i(\mathbf{x}) \quad \frac{\partial L}{\partial x_j} = 0 \quad (j = 1, 2, \dots, m)$$

カルーシュ・クーン・タッカー条件 (KKT条件)

KKT条件とは、「非線形計画において一階導関数が満たすべき最適条件」を指す。

※「ラグランジュの未定乗数法」が等式制約のみを扱うのに対し、「KKT条件を用いた解法」は不等式制約も扱うことができる。

KKT条件

- 制約付き最適化問題において最適解が満たす条件

制約 $g_i(\mathbf{x}) \geq 0 (i = 1, 2, \dots, n)$ のもとで、 $f(\mathbf{x})$ が最小となる \mathbf{x}^* は、以下の条件を満たす

$$\frac{\partial L}{\partial x_j}|_{\mathbf{x}^*} = 0 \quad (j = 1, 2, \dots, m)$$

不等式制約でも解けるようになる

$$g_i(\mathbf{x}^*) \leq 0, \lambda_i \geq 0, \lambda_i g_i(\mathbf{x}^*) = 0 \quad (i = 1, 2, \dots, n)$$

(Lはラグランジュ関数、λはラグランジュ乗数である)

ラグランジュの未定乗数法

$$\text{ラグランジュ関数} \quad L(\mathbf{w}, b, \boldsymbol{\lambda}) = \frac{1}{2} \|\mathbf{w}\|^2 - \sum_{i=1}^n a_i (t_i(\mathbf{w}^T \mathbf{x}_i + b) - 1)$$

$a_i \geq 0 (i = 1, 2, \dots, n)$ はラグランジュ乗数である。
そして、最小となる \mathbf{w}, b は以下を満たす。

∴

$\frac{n}{n}$

∴

$$\frac{\partial L}{\partial \mathbf{w}} = \mathbf{w} - \sum_{i=1}^n a_i t_i \mathbf{x}_i = \mathbf{0}$$

$$\frac{\partial L}{\partial b} = - \sum_{i=1}^n a_i t_i = 0$$



$$\mathbf{w} = \sum_{i=1}^n a_i t_i \mathbf{x}_i$$

$$\sum_{i=1}^n a_i t_i = 0$$

不明点: ??? \mathbf{w} がゼロになってしまうが。。。

双対問題

- ラグランジュ関数から \mathbf{w}, b を消去

$$\begin{aligned}\tilde{L} &= \frac{1}{2} \|\mathbf{w}\|^2 - \sum_{i=1}^n a_i (t_i(\mathbf{w}^\top \mathbf{x}_i + b) - 1) \\ &= \frac{1}{2} (\sum_{i=1}^n a_i t_i \mathbf{x}_i)^\top (\sum_{j=1}^n a_j t_j \mathbf{x}_j) - \sum_{i=1}^n a_i t_i (\sum_{j=1}^n a_j t_j \mathbf{x}_j)^\top \mathbf{x}_i - b \sum_{i=1}^n a_i t_i + \sum_{i=1}^n a_i \\ &= \sum_{i=1}^n a_i - \frac{1}{2} \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n a_i a_j t_i t_j \mathbf{x}_i^\top \mathbf{x}_j\end{aligned}$$

- 双対問題の目的関数と制約条件

$$\max_{\mathbf{a}} \sum_{i=1}^n a_i - \frac{1}{2} \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n a_i a_j t_i t_j \mathbf{x}_i^\top \mathbf{x}_j$$

$$\sum_{i=1}^n a_i t_i = 0$$

$$a_i \geq 0 \quad (i = 1, 2, \dots, n)$$

主問題と双対問題

- 主問題の最適解と双対問題の最適解は一対一対応

$$\mathbf{w} = \sum_{i=1}^n a_i t_i \mathbf{x}_i$$

$$b = \frac{1}{t_i} - \mathbf{w}^\top \mathbf{x}_i \quad (\text{KKT条件の相補性条件 } a_i (t_i(\mathbf{w}^\top \mathbf{x}_i + b) - 1) = 0 \text{ より } a_i > 0 \text{ となる } i \text{ に対して})$$

■予測

予測

- SVMの決定関数

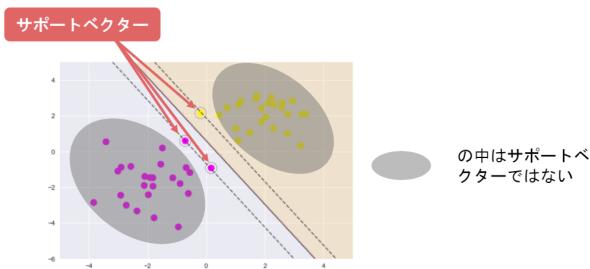
$$y(\mathbf{x}) = \mathbf{w}^\top \mathbf{x} + b = \sum_{i=1}^n a_i t_i \mathbf{x}^\top \mathbf{x} + b$$

KKT条件の相補性条件 $a_i (t_i(\mathbf{w}^\top \mathbf{x}_i + b) - 1) = 0$ から、

- $t_i(\mathbf{w}^\top \mathbf{x}_i + b - 1) > 0$ のとき、つまりマージンの外側のデータでは $a_i = 0$ となり予測に影響を与えない。
- $t_i(\mathbf{w}^\top \mathbf{x}_i + b - 1) = 0$ のとき、つまりマージン上にあるデータでは $a_i > 0$

となり、予測に影響を与える。(サポートベクター)

- 分離超平面を構成する学習データは、サポートベクターだけで残りのデータは不要



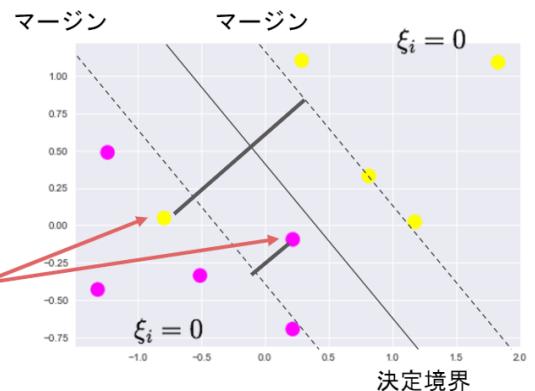
ハードマージンSVM: 線形分離可能な場合

ソフトマージンSVM

- サンプルを線形分離できないとき
- 誤差を許容し、誤差に対してペナルティを与える

ξ : クサイ

マージン内に入るデータや誤分類されたデータに対して誤差を表す変数 ξ_i を導入する



ソフトマージンSVMの目的関数と制約条件

ソフトマージンSVMの目的関数と制約条件は以下のようになる

$$\frac{1}{2} \|\mathbf{w}\|^2 + C \sum_{i=1}^n \xi_i$$

マージンの大きさ
 誤差に対するペナルティ
 トレードオフを制御するパラメータ

→ 双対表現

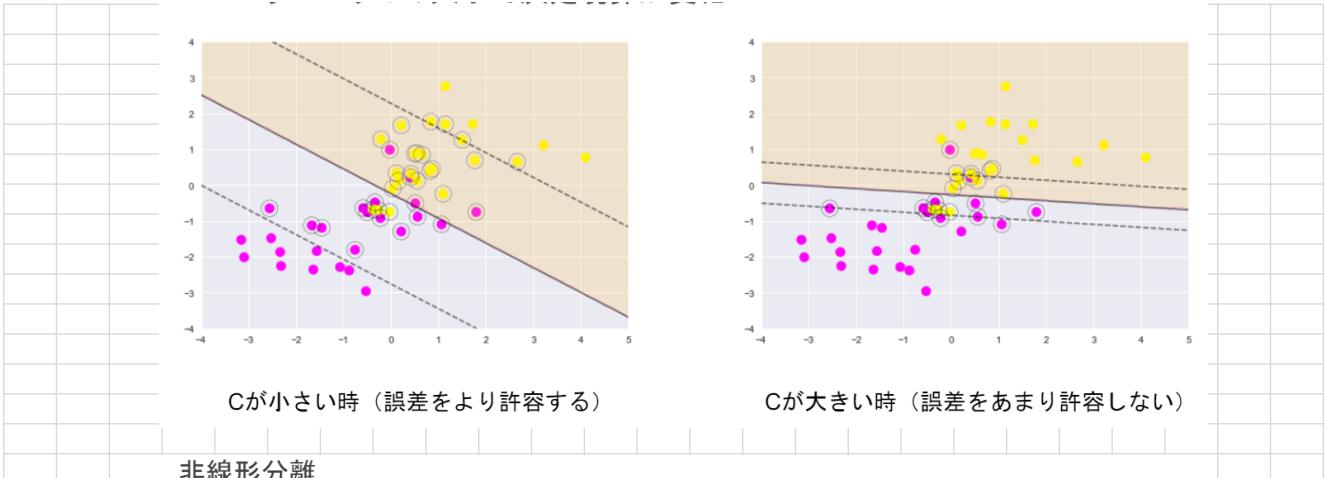
$$\begin{aligned} & \max_{\mathbf{a}} \sum_{i=1}^n a_i - \frac{1}{2} \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n a_i a_j t_i t_j \mathbf{x}_i^T \mathbf{x}_j \\ & \sum_{i=1}^n a_i t_i = 0 \end{aligned}$$

$$0 \leq a_i \leq C \quad (i = 1, 2, \dots, n)$$

$$t_i(\mathbf{w}^T \mathbf{x} + b) \geq 1 - \xi_i, \quad \xi_i \geq 0$$

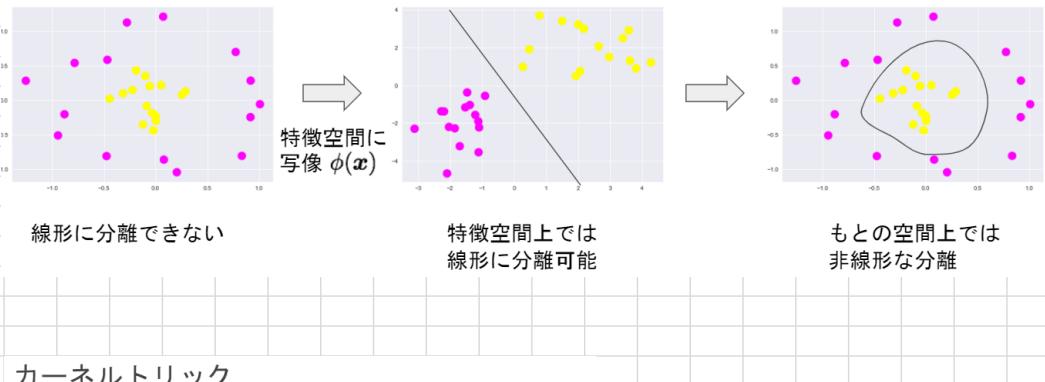
ソフトマージンSVM

- 線形分離できない場合でも対応
- パラメータCの大小で決定境界が変化



非線形分離

- ・ 線形分離できないとき
- ・ 特徴空間に写像し、その空間で線形に分離する



カーネルトリック

目的関数は以下のように変わる

$$\max_{\mathbf{a}} \sum_{i=1}^n a_i - \frac{1}{2} \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n a_i a_j t_i t_j \phi(\mathbf{x}_i)^T \phi(\mathbf{x}_j)$$

ここのみ変化

カーネルトリック

- ・ カーネル関数 $k(\mathbf{x}_i, \mathbf{x}_j) = \phi(\mathbf{x}_i)^T \phi(\mathbf{x}_j)$
- ・ 高次元ベクトルの内積をスカラー関数で表現
- ・ 特徴空間が高次元でも計算コストを抑えられる

非線形カーネルを用いた分離

- ・ 非線形な分離が可能

放射基底関数カーネル (RBFカーネル・ガウシアンカーネル) を用いる

$$k(\mathbf{x}_i, \mathbf{x}_j) = \exp\left(-\frac{\|\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j\|^2}{2\sigma^2}\right)$$

